日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、
日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。
楽しみながらたくさん読んでください。
わかるものをたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。
読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいでしょう。
目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

1 やさしいレベルから読む。
2 辞書を引かないで読む。
3 わからないところは飛ばして読む。
4 進まなくなったら、他の本を読む。

にほんごよむよむ文庫 レベル2

一休さん

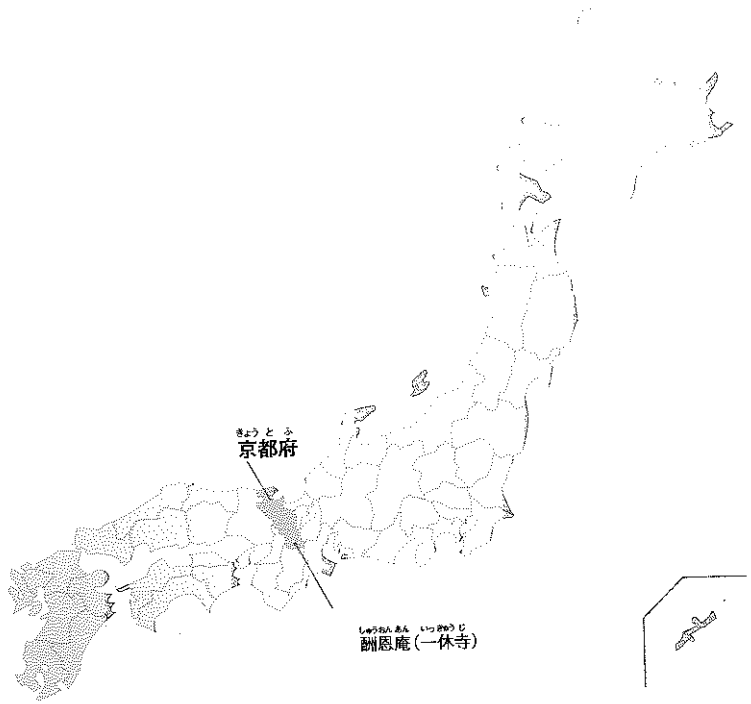
再話（さいわ）：山崎 倶子（やまざき ともこ）
：松田 緑（まつだ みどり）
挿絵（さしえ）：東 真人（ひがし まさと）
監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

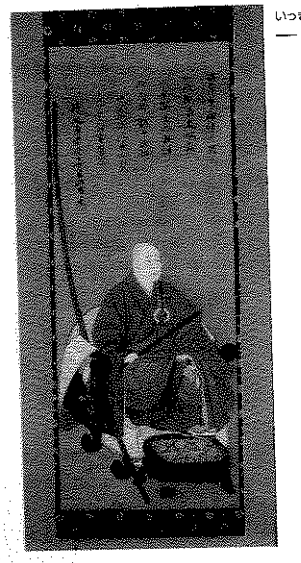
一休和尚（一三九四～一四八一年）

日本人は「一休さんの話」が大好きです。「一休さんの話」は、江戸時代（一六〇三～一八六八年）の頃から人気がありました。この「一休さん」は、本当にいたのでしょうか。

「一休」というお坊さんは本当にいました。京都で生まれて、八十八歳で死にました。京都府の南にある、京田辺市の寺（酬恩庵）に墓があります。天皇の子どもとして生まれて、六歳の時に安国寺に入って、お坊さんになる勉強をしました。若い時から詩や字を書くことが上手でした。ちょっと変わった人で、おもしろいことをたくさんしました。

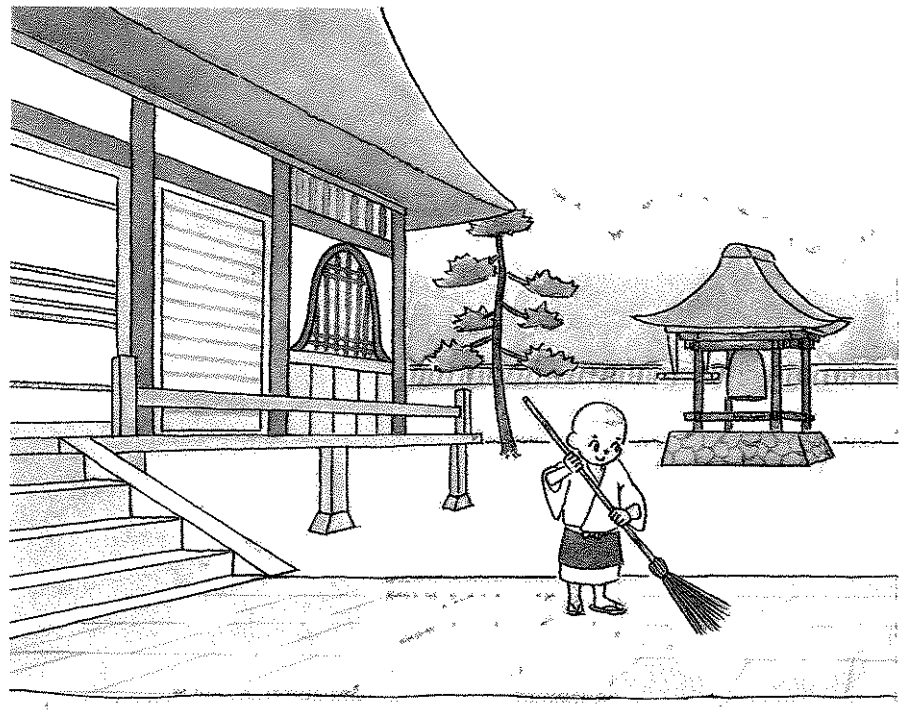
「一休さんの話」はたくさんあります。でも、その中には、一休さんがしたことではない話も入っています。日本のあちこちで頭のいいお坊さんがしたおもしろいことが、たくさん集まって、「一休さんの話」になったのです。





一休和尚（酬恩庵所蔵）

一休寺（酬恩庵提供）



一三九四年、京都に一人の男の子が生まれました。一休さんです。

一休さんは、六歳のとき、寺に入りました。寺は、お坊さんが住んでいる建物です。

お坊さんは、仏教を教える人です。

一休さんは、有名なお坊さんたちに、仏教や勉強を教えてもらいました。そして、お坊さんになりました。

一休さんは、小さいときから、とても頭がいい子どもでした。

大人が答えることができない難しい問題にも、すぐ答えることができました。

おもしろい話をたくさんしました。

さあ、一休さんは、どんなことをしたり、話したりしたのでしょう。

おいしい薬

一休さんは、子どものとき、安国寺で勉強していました。
寺で一番上のお坊さんを「おしょうさん」と言います。若いお坊さんたちの先生です。
ある日、一休さんが、おしょうさんの部屋の前に来ると、部屋の中から小さい音が聞こえました。

――あ、またおしょうさまが何かを食べている――

一休さんは、静かに部屋の中を見ました。すると、おしょうさんが一人で何かを食べていました。

一休さんは言いました。

「おしょうさま、何を食べているんですか」

おしょうさんはびっくりして、

一休さんを見ました。

「こ、こ、これは、……く、薬ですよ。足の薬です。私は、おじいさんですから、足が痛いんです」

「え、足の薬ですか。私にもその薬をください。私も、足が痛いんです」

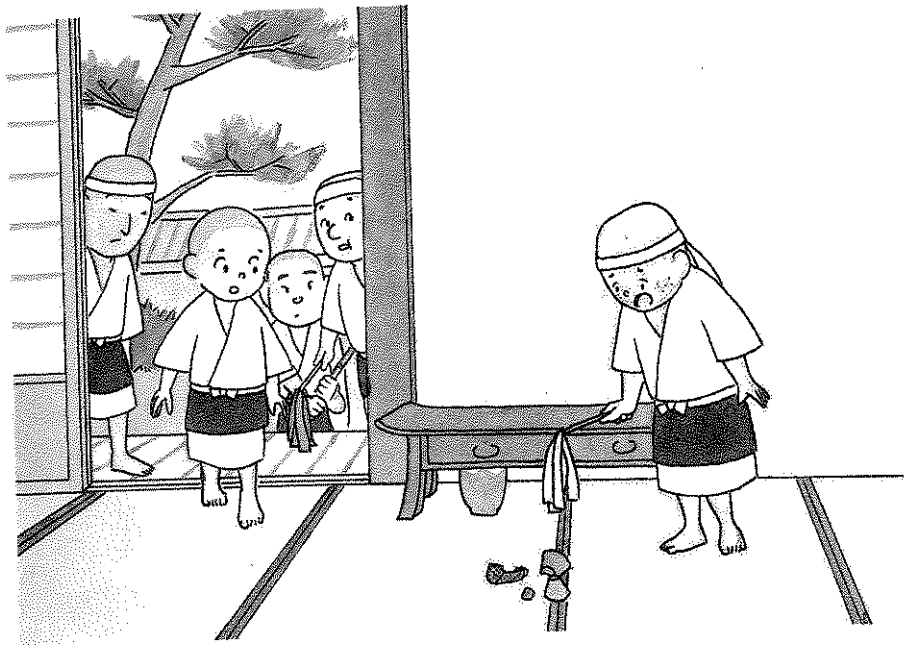
「え、それはできません。これは、おじいさんの薬です。若い人が食べると死にますよ」

と言って、おしょうさんは、薬の入れ物を机の下に入れました。

「それは大変。私は死にたくないです」
そう言うと、一休さんは、おしょうさんの部屋を出ました。そして、笑いました。

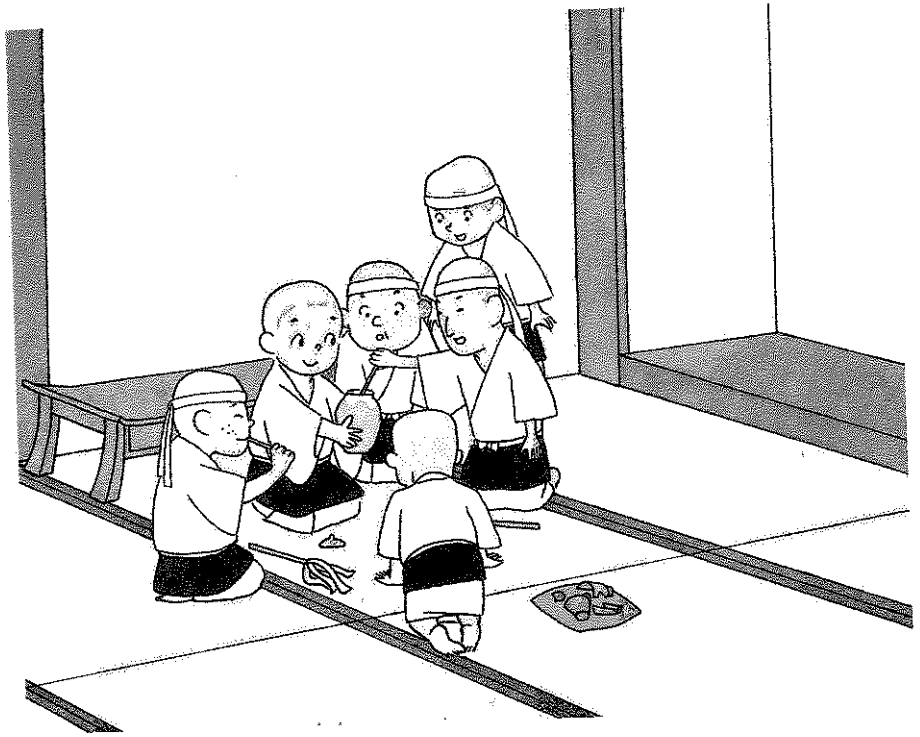
それから、三日後、おしょうさんは、隣の町に行きました。
寺では、若いお坊さんたちが掃除をしていました。

「ガチャン！」
おしょうさんの部屋から大きい音がしました。そして、
「わぁー」
と、大きい声が聞こえました。みんなびっくりして、おしょうさんの部屋へ行きました。
そこには、掃除をしていた上建さんが、青い顔で立っていました。



「上建さん、どうしましたか」
みんなが聞きました。
「大変です。これを見てください。
私は、おしょうさまの茶碗を割りました」
そう言うと、上建さんは泣きました。
「それは大変だ。困った、困った。
これは、おしょうさまの大切な茶碗だ」
若いお坊さんたちは、青い顔で
言いました。

でも、一休さんだけは笑っています。
「みなさん、心配しないでください。大丈夫です。一緒にこれを食べましょう」
そう言うと、一休さんは、机の下から薬の入れ物を出しました。
みんなは言いました。
「それは、何ですか」
「これは、おしょうさまの足の薬ですよ」
「えっ、足の薬……？　私たちは足は痛くありません」
一休さんは、笑いながら、その薬を口に入れました。
「甘くておいしいですよ」
「え？　甘いんですか。じゃあ、私も食べます」
「私も食べます」



若いお坊さんたちは、それを口に入れました。
「あ！　これは、薬ではありませんね。お菓子です」
と、上建さんが言いました。
「そうです。お菓子ですよ。水飴ですよ」
と、一休さんは言いました。
お坊さんたちは、おいしい物や甘い物は、あまり食べません。だから、この水飴をとてもおいしいと思いました。
「おいしい、おいしい。甘い、甘い」
お坊さんたちは、入れ物の中の水飴を全部食べました。

そのとき、おしょうさんが帰ってきました。
上建さんが言いました。
「あっ！　おしょうさまだ。大変だ」
一休さんは言いました。
「さあ、みんな、大きい声で泣いてください」
みんなは泣きました。
「わーん」
「えーん」
おしょうさんは、びっくりしました。
「みんな、どうしたんですか」

一休さんが答えました。

「おしょうさま、ごめんなさい。この部屋を掃除したとき、おしょうさまの大切な茶碗を割りました。私たちは悲しくなりました。そして、死にたいと思いました。だから、この薬を食べたんです。でも死にませんでした。もっと食べました。でも死にませんでした。全部食べました。まだ死にません。ごめんなさい、ごめんなさい」

「うーむ」

おしょうさんは、何も言うことができませんでした。

将軍と虎

そのころ、日本で一番強い人は、将軍でした。

一休さんがとても頭がいい子どもだと聞いて、将軍は、一休さんに会いたいと思いました。

ある日、将軍は、安国寺のおしょうさんに言いました。

「私は一休に会いたい。私の家に連れてきなさい」

おしょうさんと一休さんは、将軍の家に行きました。将軍の家は、とても立派でした。部屋には、きれいな絵がたくさんありました。

「一休、おまえは頭がいいから、何でもできるだろう。この絵を見なさい」

と、将軍は言いました。

それは、虎の絵でした。
「この虎は人を食べるから、とても危ないのだ。
一休、この虎を縄でつかまえなさい」
この虎は、絵の虎ですから、つかまえることができません。一休さんは、どうするでしょう。
おしょうさんは心配しました。
しかし、一休さんは、笑っていました。
そして、
「わかりました。私が縄でつかまえます」
と言って、縄を持って虎の絵の前に立ちました。

「将軍さま、私が縄でつかまえますから、早く虎を絵から出してください」
「うーむ」
将軍は、何も言うことができませんでした。

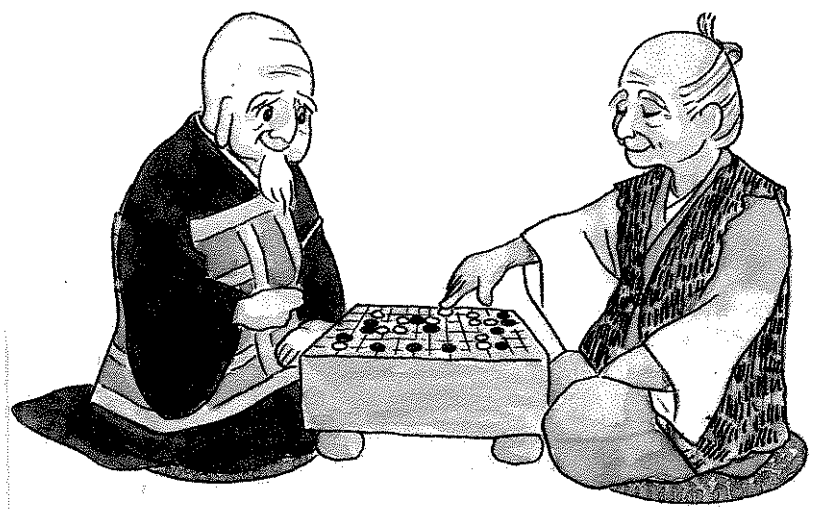
おしょうさんの友だち

安国寺のおしょうさんのところへ、ときどき、仁兵衛という人が遊びに来ます。仁兵衛さんは、大きい店の主人で、おしょうさんの友だちです。

二人は、いつも「碁」をします。

「碁」は、黒い石と、白い石を使うたいへんおもしろい遊びです。

二人が「碁」を始めると、何時間でも「碁」をしています。夜遅くなっても、終わりません。



仁兵衛さんは、おしょうさんの大切な友だちで、お客さまですから、若いお坊さんたちは、ときどき、お茶やお菓子を持っていかなければなりません。

仁兵衛さんが「碁」をしに来ると、若いお坊さんたちは、寝たくても寝ることができないのです。みんな困っていました。

ある日、仁兵衛さんが寺へ来ると、寺の門の前に大きい紙がありました。

仁兵衛さんは、それを見て言いました。

「これは何だろう……？」

動物の皮を着ている人は、
寺の門の中に
入ってはいけません

仁兵衛さんは、それを読んで、
「これを書いた人は、一休だな」
と、すぐわかりました。

仁兵衛さんは、いつも動物の皮の上着を着ています。仏教では、動物を殺したり、動物の皮を使ったりしてはいけません。仁兵衛さんは、この日も動物の皮の上着を着ていました。

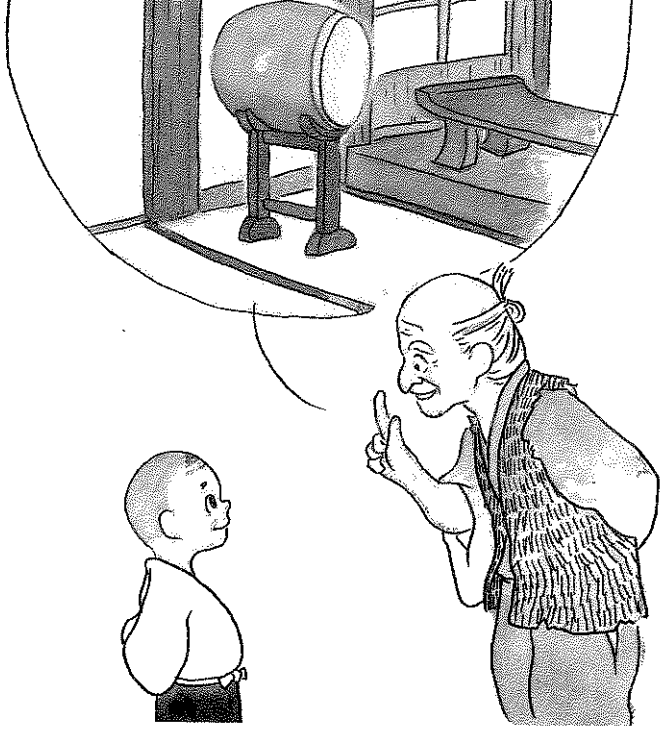
仁兵衛さんは、紙を見て、少し考えていましたが、寺の門を入っていきました。

おしょうさんの部屋の前に、一休さんがいました。

「仁兵衛さま、門の前の紙を見なかったんですか」

「ああ、見たよ。一休、おまえが書いたのだね」

「仁兵衛さま。仁兵衛さまは、いつも動物の皮の上着を着ていますね。動物の皮を寺の中に入れることはできません。帰ってください」



仁兵衛さんは、にっこり笑いました。
「動物の皮がいけないのか。
でも、寺には太鼓があるね」
太鼓には動物の皮を使います。頭がいい一休さんも、何も言えないでしょう。困るでしょう。仁兵衛さんは、そう思うと、うれしくなりました。
でも、一休さんは、困りませんでした。仁兵衛さんの言葉を聞くと、にっこり笑いました。そして、太鼓を打つ棒を二本出しました。

「そうですね。太鼓は動物の皮を使っていますね。
だから、朝と夜、この棒で打つのです。
仁兵衛さまも、夜までお寺にいると、この棒で打ちますよ」
仁兵衛さんは、
――あ、そうか。私が夜まで寺にいるから、若いお坊さんたちが困っているのだな――
と思いました。
「一休、わかったよ。これからは、早く帰るよ」
それから、仁兵衛さんは、寺に来て「碁」をしても、夜になる前に帰りました。

Přír.č. 15-9730-08
Sign.
Syst.č. 564747

にほんご よむよむ文庫

これは、日本語学習者のための「読みもの」シリーズです。
学習者がレベルに応じて、楽にたくさん読めるように、語彙や文法が制限してあります。

■初級から中級まで４レベルあり、昔話、創作、名作、伝記など内容もさまざまです。楽しく読んでもらうために、カラー挿絵が豊富に使われています。

■漢字には全部ふりがなが付いています。たくさん読むうち自然に漢字の読み方や言葉が身につくでしょう。また、レベル３まではカタカナにもふりがなが付いています。

■例外的に制限語彙以外の言葉が使われている部分もありますが、その場合は文中で説明したり、挿絵を付けるなどして、理解できるよう工夫されています。

■朗読 CD を聴きながら読んだり、読んだ後で、朗読だけ聴いて楽しむこともできます。また、シャドーイングをして発音やリスニング力をつけることもできるでしょう。

レベル	能力試験	語彙	字数／１話	主な文法項目
1 初級前半	4級	350	400 ～1500	現在形、過去形、疑問詞、～たい　など ※「です・ます体」だけを使っています。
2 初級後半	4級	500	1500 ～2500	辞書形、て形、ない形、た形、 連体修飾、～と（条件）、～から（理由）、 ～なる、～のだ　など
3 初中級	3級	800	2500 ～5000	可能形、命令形、受身形、意向形、～とき、 ～たら・ば・なら、～そう（様態）、 ～よう（推量・比喩）、複合動詞　など
4 中級	2級	1300	5000 ～10000	使役形、使役受身形、～そう（伝聞）、～らしい、 ～はず、～もの、～ようにする／なる、 ～ことにする／なる　など

※語彙は、『日本語能力試験出題基準［改訂版］』（凡人社）の級別語彙表を参考にレベル分けしています。
※文法項目は、市販されている主な初級のテキストの文法シラバスを調査したり、実際に日本語学習者に読んでもらうなどして、レベル分けしました。

テキスト名
「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」スリーエーネットワーク編著　スリーエーネットワーク
「新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ」文化外国語専門学校編著　凡人社
「JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅰ～Ⅱ」筑波ランゲージグループ著　凡人社
「Situational Functional Japanese Ⅰ～Ⅲ」国際日本語普及協会著　講談社インターナショナル
「初級日本語 げんき Ⅰ・Ⅱ」伊野 永里、大野 裕 ほか著　ジャパンタイムズ

2570809730

＜監修者紹介＞

NPO法人 **日本語多読研究会**（にほんご たどく けんきゅうかい）

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、2002年１月に発足した日本語教師の集まりです。2006年９月にNPO法人になりました。「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」授業の実践・研究をしたりしています。http://www.nihongo-yomu.jp/

レベル別日本語多読ライブラリー（にほんご よむよむ文庫）
［レベル2］vol.1
一休さん

2006年10月10日　初版発行

再話：山崎 倶子（日本語多読研究会会員・日本語教師）「おいしい薬」「将軍と虎」
　　松田 緑（日本語多読研究会会員・日本語教師）「おしょうさんの友だち」
作画：東 真人
監修：NPO法人 日本語多読研究会

ナレーション：山中 いっとく
録　音・編　集：スタジオ グラッド
デザイン・DTP：有限会社トライアングル

発行人：天谷 修平
発　行：株式会社アスク　出版事業部
　　〒162-8558　東京都新宿区下宮比町2-6
　　TEL.03-3267-6866　http://www.ask-digital.co.jp
印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。
乱丁・落丁はお取り替えいたします。
© NPO法人 日本語多読研究会 2006
Printed in Japan　ISBN4-87217-625-1